



嘉平太さんは60歳から74歳までの14年間貯蓄増強中央委員会
会長をしました。嘉平太さんは、日本をよくしていくためにこの役を引き受け
られたのです。嘉平太さんはどんな考えや方法で、この役職を務められたのか
嘉平太さんの書かれた本『二十一世紀へのメッセージ』から探してみました。

何が浪費や濫費なのか、何が無駄づかいなのかの判断が大切で、こういう
考え方をしていけば、当然生活が計画的になり目標をちゃんと立てることにな
るので、一生懸命貯蓄に励むことになる。お金がたまることが目的ではなく
結果になる。大衆の中に入って、膝つき合わせて話し合いをしてこそ心の
底からわかってもらえるのだと思う。

物があふれ、物を消費することが経済力を高めることだと考える人にとって
貯蓄などという姑息な手段は性に合わないかもしれない。ところが、一見
現代風ではないこの手段をよく考えてみると人間生活そのものであり原始的な
時代から一貫して今日まで続いている人間の特性なのである。計画的にため、
計画的に消費する。この繰り返しが今日の文明を生み出したことを思うと
“貯蓄こそ文明の母”だと確信する。

考え いらぬ消費はせずに、目標を持って計画的に貯めて、つかう

方法 日本全国を700か所をまわり、目の前の人に自分の言葉で話した

貯蓄増強運動は、日本銀行が起こした運動で、戦後の日本経済を建てなおすために国民に貯蓄を
奨励し、金融機関の預金高をふやして必要なお金(財源)を得ることが当時の目的でした。日本は
戦争でお金を使い果たし、復興に必要な財源がほとんどないぎりぎりの経済状態でした。

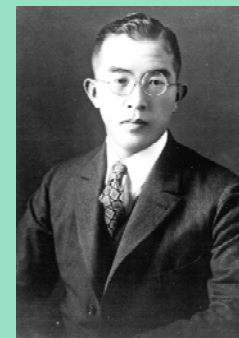


編集・発行：岡崎嘉平太記念館
〒716-1241 加賀郡吉備中央町吉川4860-6 きびプラザ内
TEL 0866-56-9033 FAX 0866-56-9066
ホームページ <http://www.okazaki-kaheita.jp>
Eメール okmh@okazaki-kaheita.jp

2010.7

岡崎嘉平太記念館だより

Vol.13



日銀本店時代の
岡崎嘉平太氏

銀行家。大分県出身。東大卒業
後明治三十八年日銀入行。昭和二年
に大阪支店長、同三年支店長の
まま理事となる。三十四、山口、
鴻池の三銀行合併を斡旋し、同八年
に発足した(株)三和銀行の初代
頭取に就任、同二〇年に退任した。
若い頃から歌道に親しみ、二十数
年間齋藤茂吉の指導を受け、歌集
も一〇点程刊行されている。
(一八七八〜一九六四)



三和銀行頭取時代

日銀大阪支店長(理事)
中根貞彦氏

中根貞彦理事

私は大学を卒業して日本銀行に就職した。昭和四年
(一九二九年)の暮れにベルリン駐在を命じられて、大阪
に行き、当時理事・大阪支店長であった中根さんに挨拶した
ときの印象、また訓辞は私の眼底、耳底に焼きついて今も
忘れることができない。(中略)一応の挨拶が済むと中根
さんは「君、ベルリンへ行ったって、おきまりの金融、経済
の報告なんか時間に費やすんじゃないよ。今ベルリンには
七社ばかりが共同して同盟通信の記者を派遣して経済報告
をさせている。君がいくら勉強をしても彼に追いつくことは
できないだろう。無理をする必要はない。それよりもドイツ
に行ったらドイツ人とよく交際して、ドイツ人の「もの
の考え方」を勉強しなさい。遊んでてもいい。つまらない報告
を書く時間をドイツの研究に当てるのだ。それは将来世界的
な問題が起きて、日本銀行としてこれに対処する方針を立て
ねばならぬとき、ドイツ人はこの問題をどう捉え、どう処理
するのだろうか、ということをお聞きすることがあるから、
それに備えるためのドイツ駐在なのである。」(中略)中根
さんの全体を見、基本に取り組みと言う教えは、私の物の
見方に根本的な変化を与え、世界的事件に対する私の推理
ないし判断をしばしば正鵠(せいこく)を射たものにした。

岡崎嘉平太氏著「私の記録」東方書店より

嘉平太氏が出会った人々

(財)岡崎嘉平太国際奨学財団奨学生の第20期奨学生4名と、事務局の三橋さんが来岡され、吉備中央町にある嘉平太氏のお墓参りをされました。

また、嘉平太氏の母校 大和小学校で交流したり、大和山の山頂では桜の記念植樹や記念館の見学などをしました。



左から、ヌックさん(タイ)、ハーさん(ベトナム)、周茂林さんと王丹さん(中国)

大和小学校では、4年生の元気な子どもたちや先生方、地域の方が温かく迎えてくださいました。左上の写真は、お抹茶や季節の柏餅をいただいているところです。また、日本の遊びなどで子ども等と触れ合い楽しい時間を過ごすことができました。

大和山に植樹された桜は、地元の方々の水やりや草刈りなどのお世話を受け、毎年春には可憐に花が咲いています。その姿をいつかまた見に訪れてくださればと願っています。